

# 初唐の三大家の評価について

— 唐・宋期の書論を中心として —

長尾秀則

一 はじめに

二 『書後品』における評価

三 『書断』における評価

四 『統書断』における評価

五 『宣和書譜』における評価

六 結語

欧陽詢・虞世南・褚遂良——三者はただ単に書の領域でのみ活躍した人ではない。中国再統一の時代、王羲之の流れを受け継ぎながら、典型的な楷書を完成させたことが書道史上、彼らの最大の功績である。今日では一般的に考えられている。しかし、唐・宋期の代表的書論をみると、必ずしもそのことが意識されていない。

本稿は、唐・宋期の代表的な書論にあたり、初唐の三大家それぞれに対する評を比較・検討することにより、初唐の三大家の書の特質と優劣を探り、あわせて、今日の評価はいつから下されたかを探るものである。

## 一、はじめに

書の分野には、現存する「作品」と同時に、書に対する理論「書論」があり、両者は相関関係にある。よって、ある人物の書について研究しようとするとき、その人物の書いた作品そのものに対しての研究と、その人物についての書論に対しての研究が総合的になされることが望ましい。

ところが、初唐の三大家——欧陽詢<sup>①</sup>・虞世南<sup>②</sup>・褚遂良<sup>③</sup>——の書の特質について研究しようとする時、我々は一つの壁にぶつかる。生前から書で名声の高かった彼らであるから、彼らについての「書論」は、多く伝わっている。

しかし、「作品」となると、問題点が多い。作品の真偽問題が絡んでくるからである。欧陽詢・褚遂良は、確たる作品が多数現存するからまだ良いが、虞世南となると、確たる作品は、「孔子廟堂碑」の原石唐拓と称する一孤本（臨川李氏本——のちの三井氏聴氷閣本）が存するのみであり、それとても、総ての文字が原石唐拓ではない<sup>④</sup>。よって、作品一つ一つ、文字一つ一つの研究がまずなされなければならない状況である。こういったことを踏まえると、「書論」によって彼らの書の特質を探索する方法が重要性を帯びてくる。

今回、資料とした書論、『書後品』・『書断』・『続書

断』・『宣和書譜』は、唐から宋にかけての代表的書論である。唐・宋期の書論を扱った理由は、当時の鑑識家が後世の学者たちよりも、もっと多くの真跡や拓本や石碑を、更に良い状況で見ることができたであろうから（一概には言えぬ）である。また、唐から宋にかけて書論では、書の考え方がより人間本位に移行している。書法よりも、書の精神性を高く評価するようになり、書の優劣上下の品第よりも、一人の人間の書として、その特性を生かして考えるようになっていく。そういった変動期の書論を扱うことにより、結果として多面的な評価が得られると考えたからである。

小論は、唐・宋期の代表的書論にあたり、欧陽詢・虞世南・褚遂良それぞれに対する評を比較・検討することにより、初唐の三大家の書の特質と優劣を探り、あわせて今日の評価はいつから下されたかを探索するものである。

## 二、『書後品』における評価

『書後品』は、唐の李嗣真（生卒年不詳）の著である。書名の示す通り、この著は梁の庾肩吾（四八五―五五一）の『書品』の後をうけたもので、文章は六朝駢儷の体であり、書の品評は、自然現象にたとえた難解な表現が多い。文中に<sup>⑤</sup>、

今人都て師範を聞かず。又、自ら鑒局無し。古迹、昭然たりと雖も、永く覚悟せず。

とあり、当時、すでに古人の典型を守らないで、自我を主とする傾向のあることを李嗣真は歎じ、古人の典型を尊重する立場をとっている。

書品を定めるにあたり、神技を得たものを最上とし、これに準じて品格の上下を位置づけるところは、六朝以来の品第法とかわりなく、さらに、一人一人書人の書体を取りあげて、書品の条件として書体の種類等を説いている点は注目すべきである。

この著では、九品の上にさらに逸品を置いて十等級に分けている。以下に示すと、

逸品——5人 上品——2人 上中品——7人 上品——12人 中上品——7人 中中品——12人 中下品——7人 下上品——13人 下中品——10人 下下品——7人（計——82人）（『書後品』による。）

となる。初唐の三大家は総て、上下品とされ、逸品には、李斯・張芝・鍾繇・王羲之・王獻之の名が挙げられている。欧陽詢に対しては<sup>(6)</sup>、

欧陽の草書は、與に競爽し難し。旱蛟の水を得、鼯兔の穴に走るが如し。筆勢、少なきを恨む。鐫勒<sup>せんりやく</sup>及び飛白諸勢に至りては、武庫の矛戟、雄劍の森森たるが如

し。

と評されている。

虞世南に対しては<sup>(7)</sup>、

虞世南は蕭散灑落、真草<sup>しんそう</sup>惟れ命のままに、羅綺の春に嬌き、鵝鴻の沼に戯るが如し。

と評されている。

褚遂良に対しては<sup>(8)</sup>、

褚氏は右軍を臨写す。亦た高足と爲す。豐<sup>えい</sup>麗<sup>れい</sup>雕刻にして、盛んに<sup>たんと</sup>当今の尚<sup>たう</sup>ぶ所と爲る。但だ恨むらくは自然に乏しく、功勤、精悉なるのみ。

と評されている。

それぞれの書の特質を述べている点は同じであるが、欧陽詢・褚遂良に関しては遺憾とする点も挙げている。欧陽詢については、草書の筆勢の少ない点を遺憾とし、褚遂良については、自然の性質に乏しく、技巧につとめて精工をつくしているにすぎない点を遺憾としている。虞世南に関しては特に遺憾とする点は挙げていない。欧陽詢に対して遺憾とする点は、筆勢（工夫）の少なさであり、褚遂良に対して遺憾とする点は、自然の性質（天然）の少なさである。（工夫）と（天然）という二つの概念は相反するものであり、これは六朝以来の品第法の影響を受けていると思われる<sup>(9)</sup>。

また、歐陽詢と虞世南に関しては、書体についての言及がみられるが、褚遂良に関しては言及されていない。歐陽詢と虞世南は、褚遂良に比べて各書体に通じていたからであらうか。欧陽詢に関してとりあげられている書体は、草書・飛白のほか鐫勒（せんろく）（金属や石に刻みしるしたもの）とあるから篆書・隸書・楷書がとりあげてあり、虞世南については、楷書・草書がとりあげられている。欧陽詢の飛白がどのようなものであるかは、今日目にすることができないが、武器がたちならぶ様に喩えられている点は興味深い。欧陽詢の楷書を頭に描く時、このことも領ける。

また、褚遂良に対しての評で、〈豊豔〉というのは、（ふつくらしてあでやかなこと）の意だとすると、褚遂良の書、特に代表作である「雁塔聖教序」の細い線を想像すると、あたらないようにも思うが、これは、ゆつたりとした結構をさすものだと解すべきだと考える。ところで、褚遂良についてのみ、右軍（王羲之）を臨書し、そのすぐれた弟子といえるとしているのはなぜであらうか。他の二者についても同様の記述があつて然るべきだと思うが、欧陽詢と虞世南は、王羲之の流れではなく、王献之の流れだと考えられていたからであらう。

### 三、「書断」における評価

『書断』を著した張懷瓘（生卒年不詳）は、八世紀に活躍した書人であり、書学書論に通じた、唐代の第一人者であった。『書断』は、彼の最も早い時期の著作で、七二四年に稿を起し、七二七年に稿了された。『法書要録』所収の『書断』は、上中下三卷から成っている。上巻では、初めに序と目録があり、十の書体についてそれぞれ源流を述べ、賛を加え、終りに論を加えている。中・下巻では、初めに各品の総目をあげ、八十六人の小伝を記し、各書体ごとに神・妙・能の三品に分けて品第し、伝中にまた附録として三十八人を取りあげ、最後に評、一篇を加えている。各品藻と人数を示すと、

神品——25人 妙品——98人 能品——107人

の如くである。人数は、のべ人数であり、それぞれの品藻において、同一人物でも重出の場合は、重ねて数えてある。初唐の三大家は、以下の表に示したように、書体別で、妙品・能品の別がある場合（欧陽詢）もあるが、総合では総て妙品の中に入れてある。次の表は、張懷瓘の初唐の三大家それぞれに対する書体別評価である。

書体別評価	書体				妙品		能品	
	人名	歐陽詢	虞世南	褚遂良	人数(98人)	隷書	行書	飛白
		○	○	○	25人	○	○	○
		○	○	○	16人	○	○	○
		○	○	○	5人			○
		○	○	○	22人		○	○
		○	○	○	5人		○	○
		○	○	○	12人		○	○
		○	○	○	15人		○	○

表によると、隷(楷)書・行書は三者とも妙品に入れられている。欧陽詢は四体が妙品に入れられ、三体が能品に入れられており、虞世南・褚遂良に比べ、各書体にわたってすぐれているとされている。以下、三者それぞれに対する評をみてみたい。

欧陽詢に対しては<sup>10</sup>、

八体尽く能くす。筆力は勁險、篆体尤も精なり。――

〈中略〉――。飛白冠絶し、古人よりも峻なり。龍蛇戦闘の象、雲霧輕濃の勢有り。風旋り電激し、掀拳神の若し。真・行の書は、大令よりすと雖も、亦た別に一体を成す。森森として武庫の矛戟の若し。風神は智永より厳しく、潤色は虞世南よりも寡なし、其の草書は迭蕩流通、之を二王に視さば、為に色を動かす可し。然れども驚奇の跳駿、危険を避けず、清雅の致に傷る。羊・薄自り以後、略は勦敵無し。唯だ永公のみ特り訓

兵精練を以て、議りて旗鼓相い当らんと欲す。欧は猛鋭を以て長駆し、永は乃ち壁を閉ざして固く守る。――〈中略〉――。飛白・隷・行・草は妙に入り、大、小篆・章草は能に入る。――〈下略〉――。

と評されている。

虞世南に対しては<sup>11</sup>、

太宗、詔して曰く、「世南一人にして出世の才有り。

遂に五絶を兼ね。一に曰く忠謹、二に曰く友悌、三に曰く博文、四に曰く詞藻、五に曰く書翰」と。一此に有るも名臣と為すに足る。而るに世南之を兼ね。其の書は大令の宏規を得、五方の正色を含む。姿榮秀出、智勇焉に在り。秀嶺危峰、処処に間起す。行・草の際は尤も偏工する所なり。其の暮齒に及び手は、加ふるに適逸を以てす。羊・薄を臭味するも、亦た宜ならずや。是れ則ち東南の美なるもの、会稽の竹箭なり。貞観十二年卒す。年八十一。伯施の隷・行・草書は妙に入る。然れども欧は虞と智均しく力敵すと謂ふべし。亦た猶ほ韓廬の東郭の兔を追ふがごとし。其の衆体を論ずれば、則ち虞の速ばざる所、欧は猛將の深く入りにて、時に或いは利あらざるが若し。虞は行人の妙選されて、罕に辞を失すること有るが若し。虞は則ち内に剛柔を含み、欧は則ち外に筋骨を露す。君子は器を蔵

す。虞を以て優れりと為す。——〈下略〉——。

と評されている。

褚遂良に対しては<sup>12</sup>、

博学通識、王佐の才有り。忠謹の臣なり、書を善くす。少きときは則ち虞監を服膺<sup>ふくよう</sup>し、長じては則ち右軍を祖述す。真書甚だ祖の媚趣を得たり。瑤台の青鎖<sup>きん</sup>、春林に窅映<sup>そうえい</sup>し、美人嬋娟<sup>せんけん</sup>として羅綺に任<sup>た</sup>へざるが若し。增華<sup>ぞうか</sup>綽約<sup>しゃくやく</sup>なるは、欧・虞も之を謝す。其の行・草の間は、即ち二公の後に居る。顕慶四年卒す、年六十四。遂良の隸・行は妙に入る。

——〈中略〉——。

と評されている。

論点がかなり、多面的になっている。欧陽詢と虞世南に關しては多くを述べているが、褚遂良は、比較すると軽くあつかわれているように思われる。また、「唯だ永公のみ特り訓兵精練を以て、議<sup>はか</sup>りて旗鼓相い当らんと欲す。」とか、「然れども欧は虞と智均しく力敵すと謂ふべし。」の様に、欧陽詢と虞世南は同等の力があるとみられている。ただ評価する尺度でどちらが上だとしている。

特に、虞世南に關しては、書のみでなく、人物も評価されており、褚遂良に關しても、「博学通誌、王佐の才有り。忠謹の臣なり。」のように、評価をうけるまでは至っていないが、その才能を記されている。欧陽詢に關しては、書

に關する点で多くの高い評価を受けているのかかわらず、人物評価が記されていないのはなぜだろうか。欧陽詢は、他の二者に比べてより専門書家的にみられていたののではないかと考えられる。思うに、身・言・書・判が唐朝の任官資格で重視された中で、欧陽詢は、身（容姿）に恵まれていなかったにもかかわらず、隋に仕えて太常博士にのぼり、唐に入つて、太子率更令・弘文館學士・太常少卿などを歴官し、ついに渤海男に封ぜられたのは、書（書法）が評価されたことにほかなるまい。もちろん、書（書法）だけが評価されたわけではないが、少なくとも欧陽詢が、他の錚々たる人物に伍して自己の存在を主張する道は、書であつたのであろう。各書体に秀でるということは、ただ単に才能のみならず、必ずためまぬ努力が欠かせないということになる。『新唐書』にも、

嘗て行くに索靖の書する所の碑を見る。これを觀てさること数歩にして復た返り、疲るるに及びて乃ち布坐し、その傍に宿するに至り、三日にして乃ち去ることを得。その嗜む所は此の類なり。（『新唐書』卷一九

八）

と記している。自己の書を構築するために、欧陽詢が払つた努力が並でなかつたことが読みとれる。

欧陽詢・虞世南は、王獻之を学び、褚遂良は、若いころ

虞世南に専ら学び、長じてからは王羲之を学んだとされている点は注目すべきである。この点については古来問題とされているが、今回は指摘にとどめておく。また、先に示した表によれば、褚遂良の行書は妙品に入れられ、他の二家も妙品であるが、「其の行・草の間は、即ち二公の後に居る。」をあわせ考えると、褚遂良の行書は、妙品ですばらしくはあるが、他の二家よりも下であると考えられていることがわかる。

欧陽詢と虞世南とは、それぞれに對比して述べられているのに比べ、褚遂良については、本人について述べているところで欧陽詢・虞世南をひきあいに出す程度で、ここにも褚遂良をいくぶん下にみる考え方が読みとれる。欧・虞と併称されるが、欧・褚、虞・褚と併称されていない理由も、このことによるのではないかと考える。欧陽詢と虞世南は年齢的にほぼ同じであるのに対し、褚遂良は四十歳近く年下である点も関係していると思われる。

#### 四、『続書断』における評価

『続書断』は、唐の初めから宋の熙寧年間（一〇六八—一〇七七）に至る書家を、神品・妙品・能品に分け、それぞれ評価をたてた、北宋の代表的書論である。一〇七四年に成立し、著者は、朱長文（一〇三九—一〇九八）。構成

は『書断』にならうとしながらも、張懷瓘と朱長文の価値観は大きく異なっている。『書断』が張芝・鍾繇・二王に至上の芸術性を認め、典雅な王羲之の書を典型とするのに対し、『続書断』は、強烈で、剛直な、顔真卿の革新性を高く評価し、神品には、顔真卿・張長史・李陽冰の三人をあげている。また、張懷瓘が、どちらかというと芸術至上主義の立場をとるのに対し、朱長文は、人物の品行を詳述し、書を人格の反映とする立場をとっている。その中で、欧陽詢・虞世南・褚遂良はすべて、妙品とされている。

欧陽詢に対しては<sup>13)</sup>、

貌は寢佚<sup>しんたつ</sup>、敏悟絶倫、書を読めば輒ち数行<sup>とち</sup>同に尽き、経史に博貫す。陳隋の際に当り、士子、書学に盛んなり。詢は逸少を師法とし、尤だ勁險に務む。嘗て行きて索靖書する所の碑を見、之を觀て、去ること数里、復た返る。疲るるに及び乃ち坐を布き、其の傍に宿ること三日、乃ち法を得るに至る。其の精なること此の如し。当世に傑出し、名を唐初に顯す。尺牘伝ふる所人以て法と為し、戎狄と雖も、亦た其の声を慕ふ。然れども其の少時を觀るに、筆勢尚ほ弱し。今、蘆山に西林道場碑有り、是なり。晩に及び手益ます壯、体力完備し、奇巧間発す。蓋し学びて以て之を致すに由る。九成宮碑、温大雅墓銘、是なり。其の正は当に纖濃中

を得、剛勁にして撓まず、人を正し法を執りて、面折廷諍するの風有り。其の点画の工妙、意態の精密に至りては、以て尚ふる無きなり。行書は黝糾蟠屈し、龍蛇振動し、戈戟森列するが如し。自ら一家を成す。八体尽く能くし、而して飛白尤も精なり。今、見るに及ばざるを恨む。高祖、微なる時、數しば與に遊ぶ。既に位に登り、累りに給事中に擢んでらる。貞觀の初め、太子率更令、弘文館學士を歴て、渤海男に封ぜらる。卒するとき年八十五。張懷瓘稱するに、「其の飛白・隸・行・草は妙に入り、小篆は能に入る」と。

と評されている。

虞世南に関しては、  
世南、貌は醇諄、外、衣に勝へざるが若し、而れども學術は淵博、論議は正を持し、少しも阿徇する無し。其の中、抗烈、奪ふ可からざるなり。故に其の書爲る、氣は秀、色は潤、意は和し筆は調ひ、然り而して内に剛特を含み、謹んで法度を守り、柔にして瀆す莫く、其の人と爲りの如し。欧・虞共に稱せらるゝと雖も、德義は乃ち詢の右に出づるなり。初め浮屠の智水、逸少の書を學びて精極、名、陳に重し。世南、從ひて學び、尽く其の法を得、而も以て之に過ぐる有り。其の隸行は皆、妙品に入る。太宗、嘗て之と書を論ず、言亦た

妙に至り、而して世南を稱して書翰の絶と爲す。此の言、諒なり。其の卒するに及ぶ也、常に甚だ之を悼み、魏王泰に手詔して曰く、「世南は我に與て猶ほ體のごとし。遺ちたるを拾い闕けたるを補ひ、日として之を忘るる無し。蓋し当代の名臣、人倫の準的、今其れ云に亡し。石渠・東觀、復た人無し。」と。――  
〈下略〉――。

と評されている。

褚遂良に対しては、  
博く文史に涉り、隸楷に工みなり。虞世南死し、太宗之を思ひ、嘆じて曰く、「虞世南死し、吾れ與に書を論ずる者無し。」と。魏鄭公、遂良を見んことを白し、帝、侍書せ令む。帝、方に博く王羲之の故帖を購ひ、天下、争いて獻ず。然れども能く真偽を質すもの莫し。遂良、獨り出づる所を論じ、敢へて舛冒する無し。夫の博學にして深く究する者に非ざれば、豈に與に數百年の旧迹を是非するに足らん哉。其の書は法多く、或いは鍾公の體を學びて、古雅絶俗、或いは逸少の法を師として瘦硬にして余り有り。章草の間に至りては、婉美華麗、皆な妙品の尤なる者なり。後、諫議大夫に遷り、屢しば讜言を進む。帝、嘗て曰く、「遂良は鯁亮にして學術有り、誠を朕に竭す。飛鳥、人に依り、



自ら憐愛を加ふるが若し。」と。——〈下略〉——。

と評されている。

ここで注意しておかなければならないことは、書の優劣上下の品第をした評がほとんどみられないことである。「欧・虞同に称せらると雖も、徳義は乃ち詢の右に出づるなり。」にしても徳義という観点で優劣をつけているにすぎない。書の考え方がより人間本位になり、書法よりも書の精神性を高く評価するようになり、書の優劣上下の品第よりも、一個人の書としてその特性を考えるようになったためであろう。

また、品評の方法が淡泊で、直接的な表現になっている点もみのがせない。宋人は意を尊び、裝飾性を嫌って、平淡な趣を主とする。水墨画、古文家の文章など、この時代の文芸は総てが平淡の美しさに終始し、しかもその平淡のうちの高い精神をもちこんでいる。書も然り、書論も然りである。評価方法からすると、宋代は、相對評価的なものから、より絶対評価的なものに移行した時代とみることもできよう。その状況を考えると、初唐の三大家、各々に対する評をここで再度比較することにより、絶対評価から相對性を導き出し、優劣や、書の特質を考えることができるのではないかと思う。

歐陽詢の「貌は寢倪、敏悟絶倫、書を読めば輒ち數行同

に尽き、經史に博貫す。」や、虞世南の「世南、貌は醇諄、外、衣に勝へざるが若し。而れども學術は淵博、論議は正を持し、少しも阿狗あしけんする無し。」や、褚遂良の「博く文史に涉り、隸楷に工なり。」など各評から、人物や、才能の点からも、初唐の三大家が高く評価され得る人物であることがわかる。

また、歐陽詢については、「詢は逸少（王羲之）を師法とし、尤だ勁險に務む。」とあり、虞世南については、「初め浮屠の智永、逸少の書を學びて精極、名、陳に重し。世南、從ひて學び、尽く其の法を得、而も以て之に過ぐる有り。」とあり、褚遂良については、王羲之の書の真偽を質なす者とし、また、「其の書は法多く、或いは鍾公の體を學びて、古雅絶俗、或いは逸少の法を師として瘦硬にして余り有り。」とある。初唐の三大家総てが何らかの形で王羲之の流れをくんでいると評されている点は注目すべきである。この評は、『書斷』の考え方とは異なっている。

書體について、歐陽詢は、「其の正は當に纖濃中を得、剛勁にして撓まず、人を正し法を執りて、面折廷諍するの風有り。其の点畫の工妙、意態の精密に至りては、以て尚くはふる無きなり。」として、楷書を絶賛され、「行書は勁糾蟠屈し、龍蛇振動し、戈戟森列するが如し。自ら一家を成す。」「八体尽く能くし、而して飛白尤も精なり。今、見る

に及ばざるを恨む。」と評されている。朱長文の時代、すでに欧陽詢の飛白書は見る事ができなくなっていたようである。ここに「飛白尤も精なり。」と評してあるのは、何か據りどころがあったのであろうか。『書後品』・『書断』にも飛白についての記述があった。『書断』で「飛白冠絶し、古人よりも峻なり。龍蛇戦闘の象、雲霧輕濃の勢有り。風旋り電激し、掀拳神の若しる」と欧陽詢の飛白について評してあったが、古人と比べている点や、具体的にどの様なものであるかを述べている点から考えると、張懷瓘の時代へ『書断』の稿了は開元十五年（七二七）にはまだ見ることできた存在であったと思われる。

虞世南では、「其の隸・行は皆、妙品に入る。」とし、褚遂良では、「隸楷に工みなり。」「章草（隸書の早書き）の間に至りては、婉美華麗、皆な妙品の尤なる者なり。」と評されている。特に欧陽詢が各書体に通じていた点はあげてあるが、これがために他の二者よりすぐれているとはしていない。また『書断』の引用はあるが、省略部分がある。

虞世南に対しては、「氣は秀、色は潤、意は和し筆は調い、然り而して内に剛特を含み、謹んで法度を守り、柔にして瀆す莫く、其の人と為りの如し。」と評し、書と人となりが同じであるとし、徳義という点で欧陽詢より上であることを、「欧・虞と称せらる」と雖も、徳義は乃ち詢の右

に出づるなり。」と明記している。褚遂良に対しては、書法・書体についての言及があり、「章草の間に至りては、婉美華麗、皆な妙品の尤なる者なり。」と評されてはいたが、人物評価よりも、技法的な面で評価を受けているように思われる。その意味で、欧陽詢・虞世南ほど高くはみなされていないように思われる。

## 五、『宣和書譜』における評価

『宣和書譜』は宋の徽宗の宣和年間（一一一九——一二二五）に、内府所蔵の書跡を集録したものである。書跡についての解説はなく、題名を著録するにすぎないが、伝記は後漢から隋唐をへて北宋末に及ぶ主要な書人をほとんど網羅し、歴代諸帝王書を除く七門の初めにある序論とともに宋の代表的な書論として高い価値を有している。特に伝記には先人の書論が多く引用されている。選者は不詳であり、序も跋文もないため、成立の事情は詳らかでない。しかし、鋭くすぐれた論評も多く、他書には残存しない記録も少なくない。

『宣和書譜』は、八門に分けられ、卷一に歴代諸帝王書、卷二に篆書と隸書、卷三から卷六に正書、卷七から卷十二に行書、卷十三から卷十九に草書、卷二十に八分書と制詔誥命を取めている。欧陽詢と虞世南は、ともに卷八の行書

の部門に入れられ、褚遂良は、卷三の正書の部門に入れられている。全文はこれまで引用した書論に比べ、かなりの長文になるので、全文の引用はここにはしない。それぞれの部門への分配は、撰者の考えによるのであるが、内府所蔵の書跡の書体が多いものによるものもあり、ある程度便宜的に分類されたものと思われる。

欧陽詢については、『新唐書』や『旧唐書』に記された内容の引用や、『書断』からの引用もみえるが<sup>16)</sup>、

然れども詢、書を以て名を得るは、実に正書に在り。化度寺の石刻の若きは、其の墨本は世の宝とする所と爲る。学ぶ者、力を尽すと雖も、到ること能はざるなり。

と、正(楷)書を絶賛しており、また<sup>17)</sup>、而して張懷瓘又た称すらく、「其の飛白・隸・行・草は妙に入り、大小篆・章草は能に入る」と。蓋し亦た各おの一家のを見を具ふ。然り而して、詢、正書を以て翰墨の冠為りと雖も、而も行字に至りては、又た復た変態百出し、当に是れ正書の亜なるべし。此に其の行字を得ること多しと爲す。

と、欧陽詢が各書体に通じており、楷書によって大家となつた点を認めつつ、行書がまた変化に富んですばらしいとされている。内府に所蔵の作品は、四十点と多く、そのうち

二十八点が行書作品というのは注目すべき点であろう。虞世南に対しては<sup>18)</sup>、

晩年、正書は遂に王羲之と相い後先す。

とまで述べ<sup>19)</sup>、

然らば世南、正書を以て称せらるると雖も、而も行書、奇処に出で、亦た名流の下に在らず。此に得る所は惟だ行字多きのみ。

とし、楷書だけでなく、行書にも奇抜なよさがあると認めている。内府所蔵の作品は十三点であり、行書作品の名が七点あげられている。ここでは、張懷瓘の『書断』を引用して、欧陽詢と対比させているが、このことは『宣和書譜』が、中国書論史の流れを踏まえたもので、決してかたよつた異端的なものではないことの傍証になるであろう。

欧陽詢・虞世南ともに、その楷書を認めつつ、行書を高く評価している点は、おさえておくべきであろう。

褚遂良に対しては<sup>20)</sup>、「隸楷に工なり。」とし<sup>21)</sup>、「正書尤も媚趣を得。」という。また、ここでも張懷瓘の『書断』からの引用がある。自らが下した褚遂良の作品に対する評価と同時に、歴代の書論の考え方も参考にしようとする筆者の意図のようなものが、ここにはつきりと読みとれる。内府に所蔵する作品は十点。そのうち楷書作品は五点。<sup>22)</sup>「遂良、喜んで正書を作る。」ともあり、褚遂良につ

いては、楷書を評価している。思えば、四十歳代に書かれた「孟法師碑」には、欧陽詢や虞世南の書風の影響が色濃くあるのに対し、五十歳代に書かれた「雁塔聖教序」は褚遂良独自の書風に変化しており、楷書に対する褚遂良の研究が並のものではなかったことがよくわかる。このようにみていくと、初唐の三大家に対する今日の評価は、この「宣和書譜」に始まると考えるのは、早計であろうか。

## 六、結 語

以上、唐・宋期の代表的書論（『書後品』・『書断』・『統書断』・『宣和書譜』）から、初唐の三大家に対する評をみてきた。欧陽詢・虞世南・褚遂良——その優劣についてはこれを論断することが容易でなく、歴代の書論でも特に比較を試みたものは少ない。各人その好むところに従って取捨しているの感は禁じ得ず、評も、書論の発展史の上で述べられており、時代の影響から評価、論点も微妙に異なってきた。が、各書論を通して一貫して評されてきたこともあった。一応のまとめをすると、

① 欧陽詢は、多くの書体に通じている点で、他の二者より優れている。（より専門的技術を持っている。）

② 虞世南については、人物評価を書の評価に加味する立場をとると、他の二者より優れている。

③ 褚遂良は、全体的にみて他の二者よりいくらか低くみられているが、楷書のたおやかさは、他の二者より優れている。

④ 初唐の三大家は、三者ともかなりの評価を受けてはいるが、『書後品』ではへ上下品、『書断』ではへ妙品、『統書断』ではへ妙品とされており、最高の品藻には入れられていない。

といった点が導き出されるであろう。

欧陽詢・虞世南・褚遂良——三者はただ単に書の領域でのみ活躍した人でないことは、周知のことである。中国再統一の時代、王羲之の流れを受け継ぎながら、典型的な楷書を完成させたことが書道史上、彼らの最大の功績である。私も思うが、唐・宋期の書論をみると必ずしもそのことが意識されていないように思われた。ただし、『宣和書譜』になると、十分にこの点が意識されてきているように考えられる。今日の評価は、この『宣和書譜』が大きな存在としてあるように考えられよう。

今後、各々の作品を研究した上で、もう一度扱う書論を増して考察したい。

## 注

（1）唐・永定——貞観一五・五五七、六四一年。欧陽詢の書

として確実なものに「九成宮醴泉銘」・「化度寺塔銘」・「皇甫誕碑」・「溫彦博碑」・「宗聖觀記」・「房彦謙碑」がある。

(2) 陳・永定二——唐・貞觀一二・五五八—六三八。虞世南の書には(伝承作品も合して)主なものに「孔子廟堂碑」・「汝南公主墓誌銘稿」・「積時帖」・「破邪論序」・「左脚帖」・「白鶴觀碑」などがある。

(3) 唐・開皇一六—顯慶三・五九六—六五八年。褚遂良の書またはその書と伝えられるものに「孟法師碑」・「雁塔聖教序」・「房玄齡碑」・「伊闕佛龕碑」・「枯樹賦」・「文皇哀冊」・「同州聖教序」・「倪寬贊」・「家姪帖」・「千字文」などがあつた。

(4) 翁方綱の「孔子廟堂碑考」に極めて詳細な考証がある。

(5) 今人都不聞師範。又自無鑒局。雖古迹昭然、永不覺悟。

(書後品)

(6) 歐陽草書、難與競爽。如旱蛟得水、鼯兔走穴。筆勢很少。至於鐫勒及飛白諸勢、如武庫矛戟、雄劍森森。(書後品)

(7) 虞世南蕭散灑落、真草惟命、如羅綺嬌春、鵝鴻戲沼。故当子雲之上。(書後品)

(8) 褚氏臨寫右軍。亦為高足。豐豔雕刻、盛為当今所尚。但恨乏自然、功勤精悉耳。(書後品)

(9) 「書品」の中で庾肩吾が批評基準としてうちたてたのが、「天然」「巧まぬ自然の妙味」「工夫」(人為的な巧妙さ)という二つの概念であつた。

(10) 八体尽能。筆力勁險、篆体尤精。——《中略》——。飛白冠絶、峻於古人。有龍蛇戰闘之象、雲霧輕濃之勢。風旋電激掀拳若神。真行之書、雖於大令、亦別成一体。森森焉若武庫矛戟。風神嚴於智永、潤色寡於虞世南。其草書迭蕩流通、視之二王、可為動色。然驚奇跳駿不避危險、傷於清雅之致。自羊薄以後、

略無勍敵。唯永公特以訓兵精練、議欲旗鼓相当。欧以猛銳長驅、永乃閉壁固守。——《中略》——。飛白・隸・行・草入妙、大小篆、草篆入能。(書斷)

(11) 太宗詔曰、世南一人、有出世之才。遂兼五絶。一日忠諫、二日友悌、三日博文、四日詞藻、五日書翰。有一於此、足為名臣。而世南兼之。其書得大令之宏規、含五方之正色。姿采秀出、智勇在焉。秀嶺危峰、処処間起。行書之際尤所偏工。及其暮齒、加以滄逸。臭味羊薄、不亦宜乎。是則東南之美、會稽之竹箭也。貞觀十二年卒、年八十一。伯施隸行草書入妙。然欧之與虞、可謂智均力敵。亦猶韓盧之追東郭兔也。論其衆体、則虞所不逮。欧若猛將深入、時或不利。虞若行人妙選、罕有失辭。虞則内含剛柔、欧則外露筋骨。君子藏器、以虞為優。——《下略》——。

(書斷)

(12) 博學通識、有王佐才。忠諫之臣也。善書。少則服膺虞監、長則祖述右軍、真書甚得其媚趣。若瑤台青鎖、宵映春林、美人嬋娟、不任羅綺。增華綽約、欧肩謝之。其行草之間、即居二公之後。——《下略》——。(書斷)

(13) 貌寢悅、敏悟絶倫、統書輒數行同尽、博貫經史。当陳隋之際、士子盛於書學。詢師法逸少、尤務勁險。嘗行見索靖所書碑、觀之、去數里復返。及疲乃布坐、至宿其傍、三日乃得法。其精如此。傑出当世、頭名唐初。尺牘所伝、人以為法、雖戎狄、亦慕其聲。然觀其少時、筆勢尚弱。今廬山有西林道場碑是也。及晚益壯、体力完備、奇巧間発。蓋由學以致之。九成宮碑、温大雅篆銘是也。其正當纖濃得中、剛勁不撓、有正人執法、面折廷諍之風。至其点画工妙、意態精密、無以尚也。行書勁糾蟠屈、如龍蛇振動、戈戟森列。自成一家。八体尽能、而飛白尤精、今恨不及見也。高祖微時、數與遊。既登位、累擢給事中。貞觀初、

歷太子率更令、弘文館學士、封渤海男。卒年八十五。張懷瓘稱、其飛白隸行草入妙、小篆入能。〔統書斷〕

(14) 世南貌醇諄、外若不勝衣。而學術淵博、論議持正、無少阿徇。其中抗烈、不可奪也。故其為書、氣秀色潤、意和筆調、然而內含剛特、謹守法度、柔而莫瀆、如其為人。雖歐虞同稱、德義乃出詢右也。初浮屠智永、學逸少書精極、名重於陳。世南從學焉、盡得其法、而有以過之。其隸行皆入妙品。太宗嘗與之論書、言亦至於妙、而稱世南為書翰之絕。此言諒矣。及其卒也。常甚悼之、手詔魏王泰曰、世南與我猶休。拾遺補闕、無日忘之。蓋當代名臣、人倫準的、今其云亡。石渠東觀、無復人矣。〔統書斷〕

(15) 博涉文史、工隸楷。虞世南死、太宗思之、嘆曰、虞世南死、吾無與論書者矣。魏鄭公白見遂良、帝令侍書。帝方博購王羲之故帖、天下爭獻。然莫能質真偽、遂良獨論所出、無敢舛冒。非夫博學深究者、豈足與是非數百年之旧迹哉。其書多法、或學鍾公之體、而古雅絕俗、或師逸少之法、而瘦硬有余、至章草之間、婉微華麗、皆妙品之尤者也。後遷諫議大夫、屢進諫言。帝嘗曰、遂良鯁亮有學術、竭誠於朕。若飛鳥依人、自加憐愛。〔統書斷〕

(16) 然詢以書得名、實在正書。若化度寺石刻、其墨本為世所寶。學者雖尽力、不能到也。

(17) 而張懷瓘又稱、其飛白隸行草入妙、大小篆章草入能。蓋亦各具一家之見。然而詢雖以正書為翰墨之冠、而至於行字、又復變態百出、當是正書之亜。此得其行字為多焉。

(18) 晚年、正書遂與王羲之相後先。

(19) 然世南雖以正書見稱、而行字出奇處、亦不在名流下。此所得惟多行字耳。

(20) 工隸楷。

(21) 正書尤得媚趣。

(22) 遂良喜作正書。

※「書後品」は、書苑菁華本、「書斷」は、法書要錄本、「統書斷」は、墨池編本、「宣和書譜」は、汲古閣本〔津逮秘書〕所収を底本とし、他書を参考にした。

※本稿は、「初唐の三大家考——唐・宋期の書論を中心に——」〔日本文学論究〕四十八、平成元年三月をともに、補筆・改稿したものである。